

島根県立石見美術館

研究紀要

第6号

2012

目次

資料紹介 島根県立石見美術館所蔵 大下藤次郎日記(第5回・最終回)	川西 由里	1
明治期の出雲焼 ―出雲・布志名焼の輸出陶器の変化について―	河野 克彦	19

〈資料紹介〉

島根県立石見美術館所蔵 大下藤次郎日記 (第5回・最終回)

川 西 由 里

明治三十六年之記

明治三十六年の記

○

外遊によって新なる希望を得しと共に更に一段の修養を要すべく深く感ぜしため帰朝後直ちに新の道に進みて比年を送れり多少経済上の不足を生ぜしも吾家の幸福には一の妨とならずして却而前途の希望に一層の熱心を生ぜしめたりき請ふ三年後の活動を見よとは吾家の表幟なりし

明治三十七年一月 大下藤次郎記

○日記摘要

北アメリカボストンに於て新春を迎ふ病める友ありて淋しかりしも他に親切なる松木氏ありて樂しかり (一月一日) △印東京宅
グレイースと共に松木店へゆく△妹弟等来泊す (一月二日)
△竹下豊田両氏来泊△子供等帰る (一月五日)
△春子宮嶋へゆく△文雄とまる (一月七日)
石川氏全快祝ありて大いに集まりピーヤをくむ (一月十一日)
蓮の図をかく△竹下氏帰校す (一月十三日)

ボストンを出発しバフワローに向ふ (一月二十一日)
バフワロー着コックス氏の宅に投宿す (一月二十二日)
バフワロー美術会にて水彩画の展覧会を開く (一月二十三日)
バフワロークラブ、オーテンクラブ等へゆく (一月二十四日)
ナイヤガラの各所を見物す△竹下氏来泊 (一月二十五日)
△春子宮嶋へ母の見舞にゆく (一月二十六日)
二十世紀婦人クラブに招かれてゆく (一月二十七日)
△春子母見舞にゆく△先頃より来泊せし政子清子帰り弟二人代り来る (一月二十九日)
△春子歯の治療漸くすむ (二月三日)
二十世紀クラブに招かれ会食す (二月四日)
バフワロー出発デトロイトに向ひホテルブランジェツリに投す (二月九日)
△金談にて宮川氏へゆく (二月十日)
ハイベチャクラブの招きによりデトロイト美術館へゆく (二月十二日)
デトロイトハンナ方にて水彩展覧会を開く△料理の稽古にゆき始む (二月十四日) 根本喜二郎氏に始めて逢ふ (二月十五日) 蓮の図をかく (二月二十六日)

パークデビスの製菓会社を見る (二月二十日)
 フレヤ氏の晩餐に招かれてゆく (二月二十二日)
 デトロイトクラブ晩餐会に臨むフレヤ氏の招きなり (二月二十四日)
 根本氏の招きにてテンブルシヤターにゆく (二月二十七日) 榎間柳
 をかく (三月一日)
 デトロイト出発ボストンに向ふ (三月五日)
 ボストン着アプレトン街に室を借る (三月六日)
 ボストン出発ニューヨークに向ふ (三月十一日)
 ニューヨーク二十五丁目に投宿す (三月十二日)
 英国行の汽船アンブリヤ号に投宿す (三月十三日)
 ニューヨークを出発しリパプールに向ふ (三月十四日)
 △春子正男と共に宮嶋へゆく (三月二十一日)
 リパプールに着N. Wホテルに投宿○リパプール美術館を見る (三
 月二十二日)
 △春子正男と共に宮嶋へゆく (三月二十三日)
 リパプール出発ロンドンに向ひモントギューなる下宿屋に投宿 (三
 月二十三日)
 ナショナルガリレーを見る (三月二十五日)
 サウスケンシントン博物館を見る○動物園を見る△子供達とまる
 (三月二十六日)
 テイトギャラリー及其他沢山の展覧会を見る (三月二十七日)
 肖像画館を見る (三月二十八日)
 画家のクーバー氏の宅の展覧会へゆく (三月二十九日)
 各所の展覧会を見る (三月三十日) プリチツシ博物館を見る (三月

三十一日)
 キューガーデンへゆく (四月三日) ピホトロムを見夜はサンマー氏
 へゆく (四月四日)
 ローヤルアルバートホールに音楽をきく (四月五日)
 ロンドンを発し夜分巴里着ホテル、ド、スフローグランドへ宿す
 (四月七日)
 和田氏の案内にてルーブル博物館へゆく (四月八日)
 レキザンブル博物館へゆく△春子大腹痛就床 (四月九日)
 △正男百日咳となる (四月九日)
 パンテオンの壁画を見る○植物園へゆく (四月十一日)
 ブットショモンの公園に遊ぶ田中氏河合氏同行なり (四月十二日)
 独立画家展覧会を見る△弥生町へゆく (四月十三日)
 トルコ館へゆく○赤字音楽会へゆく (四月十四日)
 小美術館を見る (四月十五日) クリニューミュージアムへゆく (四月
 十六日)
 新派サロンにゆき見る (四月十九日)
 鹿子木と共に寄席へゆき見る (四月十九日)
 オテル・ド・ビルを見る (四月二十日) ゴブラン織物工場を見る
 (四月二十二日)
 諸画堂を見る○夜劇場へゆく△半田逃走まさ子帰宅すととき (四月
 二十三日)
 巴里の諸友と共に郊外ロバンソンへゆき散歩す (四月二十五日)
 ベルサイユの各所を見る (四月二十六日)
 ボア公園を見る○凱旋門に上る (四月二十八日)

カシノ・ド・パリにゆく(四月三十日)
巴里オペラを見る(五月一日) 大サロンを見る(五月二日)
大サロンを見る○七時出発 ロンドンへ向ふ△春子正男職業学校々友
会にゆく(五月三日)
△弥生町ふさ子山下と結婚の式あり(五月四日)
ロンドン着 カラー七十六番の下宿に投ず(五月四日)
ロイヤルアカデミー其他を見物す(五月五日)
ニューガリレー其他の展覧会を見る(五月六日)
夜汽船サヌキ丸に搭乗す(五月七日)
サヌキ丸にてロンドン出発日本に向ふ(五月八日)
△弥生町里帰りに招かれ春子出席す(五月十日)
ホートセイドに着す(五月二十日)
コロポに着す(六月三日) △春子政子正男と共に展覧会へゆく
(六月六日)
シンガポールに着す(六月九日) シンガポール出発す(六月十一日)
△鈴木氏名命式に臨む正男同行(六月十三日)
ホンコンに着す(六月十六日) ホンコンを出発す(六月十九日)
神戸港に着し某屋に投宿す(六月二十四日)
大阪にゆき博覧会を見堺水族館を見山本へ立より竹下妻君の墓参を
なす○堺丸三旅店に投宿す(六月二十五日)
神戸に帰り畠中といへるに投宿す(六月二十六日)
信濃丸に乗り横浜に向ふ(六月二十七日)
夕景横濱着竹下長野両氏待受らる○夜に入帰宅(六月二十八日)
竹下氏宅の歓迎会に臨み美術上の話をなす(七月五日)

動物虐待防止会に出席講話をなす(七月十五日)
青梅へ遊びにゆく(七月十九日)
岩村氏を訪ひ新海氏に逢ひ龍土軒にて会食す(八月四日)
中丸氏観月の会に招かれゆく(八月八日)
金天会第一回に臨む(八月十日) 鈴木氏のため水彩画をかく(八月
十一日)
関口の家を閉ち青梅へ移るため荷物の仕末をなす(八月十二日)
家を明け関口岩次郎氏に托す○正男春子四谷へとまる○主人弥生町
へゆき竹下に泊す(八月十三日)
四谷宮嶋へとまる(八月十四日) 青梅に移り仲町に借家す(八月十
五日)
秋葉山を写生す(八月二十一日) 矢ヶ貫に蓮の写生をなす(八月二
十三日)
秋葉山の写生成る(八月二十四日) 松の図を写生す(八月二十五
六日)
蓮の図をかく(八月二十七、八日) 東京より連れ来りし鈴子を帰す
(八月二十七日)
へチマの図をかく(八月二十八、二十九日)
春子再び右眼を病み始む(八月二十九日)
井上通泰氏の診療を受くるため春子東京へゆく(八月三十日)
夕の列車にて春子帰り来る(八月三十一日)
千ヶ瀬台に写生す○大柳写生をなす(九月一、二、三日)
小石川の宅九月一日より雛田文学士に貸す(九月一日)
琴河原流れを写生す(九月四、五日)

- 絵を直す○春子病気医師来る自分一人にて大いに苦む（九月七日）
 春子猶よからず人手なくして余自ら炊事す（九月九日）
 出京す○金天会へ出席す○四谷宮嶋に二泊す（九月十日）
 宮嶋母を伴ひ青梅に帰る（九月十一日）
 琴河原の写生をなす（九月十四日）記念の小画月をかく（同日）
 春子正男東京へゆく○宮嶋母帰京す（九月十五日）
 月の図をかく（九月十六、十七日）春子等帰宅す敬子今日より来る
 （九月十六日）
 琴河原及大柳写生をなす（十八、十九日）
 浮月の庭をかく（九月二十一日）毎日絵葉書をかく（九月二十二日）
 眼病のため春子出京す即日帰京（九月二十二日）
 △この部分に一枚の挟み込みあり（図1）▽
 浮月の庭をかく○毎夜琴のけい古あり敬子のためなり（九月二十二日）
 日）
 琴河原の月をかく（九月二十三、四日）
 家族共四人にて北斗山に遊び写真をとる（九月二十四日）
 熊本桜の図をかく（九月二十五、六日）
 絵を直す○午後より出京す○自分等の歓迎会場宝亭へゆく○竹下氏
 に二泊す（九月二十八日）
 白馬会を見る○菊地を訪問す○夕帰宅す（九月二十九日）
 絵を直す○大作大柳の夕陽をかく（九月三十日、十月一、二、三、
 五、六日）
 春子東京へゆく即日帰宅（十月一日）
 渡辺安の助氏来る一泊さる（十月二日）
- 仲秋北斗山に登り月を見る家内不残ゆく（十月五日）
 山上の松写生す（十月六、七、八日）
 東京より高橋徳平来り一泊す汽車賃を惠みて帰す（十月九日）
 春子東京へ一泊がけにてゆく（十月十一日）蓮池をかく（十月十、
 十二日）
 赤坂のオクラをかく（十月十二、十三、十四日）
 出京す○白馬会を見る○竹下氏に一泊す（十月十五日）
 植物園の写生をなす○竹下氏に泊す（十月十六日）同（十月十七日）
 竹下氏の新築祝に臨む○宮嶋事件に付飯田町へゆく○竹下氏に泊す
 （十月十八日）宮嶋事件に付話をなし午後帰宅す（十月十九日）
 絵を直す（十月二十日）河部に写生す（十月二十一日）
 聖博出品の植物園の図をかく（十月二十二、二十三、二十六、二十
 七、二十八、二十九、三十日）
 琴河原の写生をなす（十月二十三日）
 青梅の人々と共に二宮に写生にゆく（十月二十四日）春子出京（同
 日）
 白玉の瀧写生にゆく同行四人（十月二十五日）
 平岡の娘に春子琴を教ゆる事となる（十月二十六日）
 夕桜の図をかく（十月三十一日、十一月二日）夕陽の写生にゆく
 （十一月二日）
 東京より信康来る（十一月三日）春子出京一泊（十一月五日）
 黒沢に菊花を写生す（十一月五、六日）
 師岡の小川を写生す○小宮氏始めて来る（十一月七日）
 万年橋下の写生をなす○所有地小作を井上幾太郎に托す（十一月九

日)

稲吉叔母、沢野氏夫妻来泊○家内不残にて山上に遊ぶ(十一月十日)
万年橋写生をつぐ○東京連中帰京す(十一月十一日)

菊の写生をなす○午後より千ヶ瀬の菊を写生す○東京より沼田氏来
る坂上に一泊久々にて会話す(十一月十二日)

春子一泊がけにて出京す○菊の写生をなす(十一月十三、十四日)

小作の景を写生す○東京より宮地柳之助来泊さる(十一月十六日)

北斗山上の景を写生す(十一月十八日)

腹痛を覚へ床上の人となる(十一月十九、二十、二十一、二十二日)

東京より長野氏来り一泊さる○五姓田芳柳氏訪はる(十一月二十二
日)

春子一泊がけにて出京す(十一月二十四日)

絵を直す(十一月二十五日)野菊の写生及絵を直す(十一月二十六、

七日)

羽村の写生を直す○東京より大下安太郎兄来らる(十一月二十八日)

小画会を催す出品者青梅の人々なり(十二月二十九日)

川霧及夕陽の写生をなす(十月三十日、十一月一日)

塩野政■入門す(十二月三日)

少しく風邪医師にかゝる(十二月二、三、四、五日)

春子出京、即日帰宅す○大柳入江をかく(十二月七日)

小画をかく(十二月八、九、十、十一、十二、十四日)

東京より政子来り二泊して帰る(十二月十四日)

小画及勝沼の図をかく(十二月十五、十六、十七、十八、十九、二

十、二十一、二十二日)

秋山おばさん来る○青梅に当分居住するためなり(十二月二十三日)

秋山稲吉平正の貸家に移る(十二月二十四日)

春子出京一泊す正男も同行す(十二月二十五日)

聖博出品画二枚共鑑査通過の報に接す(十二月二十六日)

小画をかく(十二月二十七日、三十日)春子病氣(十二月二十八、
二十九、三十日)

○経過

新年は北アメリカポストンに於て向へ家族は東京小石川の宅に於て
迎えたり一月末パフワローにゆき二月初旬デトロイトに移り三月再
びポストンに帰りニューヨークに出て海を越へてリパブルに着口
ンドンに入り四月巴里に遊び五月ロンドンに帰りに乗船六月下旬帰
朝したり

修養のため八月中旬家族を伴ひて青梅に移り仲町に家を貸して爾来
写生に勉む九月より秋山敬子来り住みて家族に一員を加へしと同時
に稍不快の点もありしが十二月末叔母稲吉の来るによつて別に一家
をなせり

○起居

前年と大差なし青梅に移りて後は休日を山上に暮らす事多し

○健康

外遊中は一度も病を得ず青梅に來りて後時に風邪を患ふることあり
十一月は腹部に病を得て医師にかゝり三四日を床中に送り十二月又

風邪熱高かりしたため医師にかゝり数日にして治せり
 春子は春來時々動氣を催し又烈しき腹痛を催す事あり九月初旬には
 尤も甚しく同時に咽喉を痛む十二月下旬にも二三日臥床にあり其度
 毎に医を迎ふ眼病は四五月の頃全治せしも更に右眼に同様なる現象
 起り八月より東京へ一週若くは二週間毎に診療を受くるためゆくこ
 ととなれり但年を越えて治せず

正男不相變虚弱にして五月の頃百日咳を病み青梅に移りて後も々々
 医の診察を受けたり

○読もの

主として読みしもの国民新聞にして後読売に代へたり雑誌雜書の類
 格別挙示すべきものなし

○学事

水彩風景画の写生にかゝるもの二十二枚複写四十一枚想像画十七枚
 なり画架に向ひし日は九十一日にて内写生は三十三日なり

歸朝以来水彩画の葉の訂正を始む

米国に於てはパフワロー及デトロイトに於て沢山の水彩画を売却せ
 り

○経済

明治三十五六兩年度の収入に於て水彩画売却代金參千參百六拾円八
 拾九錢貸金回収金七拾壹円拾壹錢借入金參百參拾円貸家料及貸地料
 金九拾六円銀行利子物品売却其他の雜収入金五百貳拾五円六拾錢合

計金四千參百八拾參円六拾錢にして兩年度の支出は經常費金千參拾
 九円臨時費金百貳拾參円負債償却金參百參拾円外遊費用金參千百拾
 參円貸金參百円なり
 十二月三十一日現在の財産は小石川地所建物時価金貳千參百円青梅
 町地所金參百貳拾円安田銀行当座預金貳拾円諸物品代金七百円現在
 金四拾八円參拾參錢合計金參千參百八拾八円參拾參錢なり

○正男日記

父上外国に在り母上と共に小石川関口駒井町の宅にて新年を迎ふ
 (二月一日) 食事進まず元氣なし (二月九日)

少しく発熱長塚氏の診察を受く (一月十、十一、十二、十四、十五
 日)

母上に伴はれ常に長塚氏の診察を受けにゆく (二月十七、十九、二
 十一、二十三日)

母上と共に三宅氏宅へゆく (二月二十五日)

風邪長塚氏の診察をうく (三月一日)

母上に伴はれ九段及宮嶋へゆく (三月二十三日)

咳烈しく出づ長塚氏の診察をうく (四月四日より二十七日迄)

病中は腰湯等をなす百日咳にして消毒其他をなす (同上)

不動様の御加持を受く (四月十六日)

殆ど快方母上に伴はれ職業学校々友会へゆく (五月三日)

風邪長塚氏の診察を受く (五月十七日、二十日、二十二日)

またよからず母上に連れられ長塚氏へ時々ゆく (五月二十五、七日)

母上及び政子おばさまと共に上野へゆく (六月六日)

母上と共に宮嶋へゆく(六月十日)

鈴木氏名命式にて母上に伴はれゆく(六月十三日)

四谷祭礼にて母上と共にゆく(六月十八日)

父上外国より帰り給ふおみやげには黒き洋服、ロンドンの靴、鎖のつきたるおもちゃ等なり(六月二十八日)

父上母上と共に神楽坂へゆく(七月三日、二十五日)

勝手元入口にて古釘に足をいため長塚氏の診察を受く○母上病院へ見舞にゆかれこの夜始めて母上とはなれてねむる(七月三十日)

青梅引移りにつき母上と共に四谷へとまる(八月十三、四日)

発熱小林氏の診察をうく(八月十六日より十九日迄)

耳ダレの気味にて鶴沢氏よりくすりも貰ひ二週間にして治す(八月二十三日より)

母上東京へ眼の治療にゆかる、間よく父と共に留守す(八月より十月迄)

前の根岸の娘等と遊ぶ○人々に愛さる○他から御菓子を貰ひしときは父母に御目にかける(八月中)

母上と共に出京す(九月十五日) 近頃よく歩行し得とて賞めらる(九月中)

風邪小林氏の診察を受く(九月三十一、十月一日、二日) 大いに咳出で、くるしむ○近頃顔赤く少しく醜くなれりと人々いふ

(十一月二十四日) 腹痛にて苦しむ(十二月九日、十日、十一日)

近頃食欲多くなり父母御安心なさる○少しく風邪(十二月二十五日) 三宅氏より面白きよせ絵の弄物送らる(十二月三十一日)

○親戚、交友

弥生町大下、目黒松本共に変りなし○神田高山にては営業可不足なしとさく○宮嶋は春来喜久井町の下宿業をやめ家屋を売却して四谷荒木町に移る不相変紛紜絶えず○半田不幸にして夫婦別れとなり政子宮嶋へ帰る○信康は富安塾に在て歯科を勉強せり○宮嶋母は七月より八月へかけて赤十字病院へ入院されたり○秋山敬子九月三■より帰りて青梅に在りしが十二月末母稲吉来りしにより山根へ借家して住む

交友前年と大差なし松木氏とは交情いよいよ密なり○帰航の船中沼田松之助氏を知る帰朝後山縣悌二郎、羽仁吉一等の諸君にも交を計す

○雑事

訪問、来訪、発信、来信共に前年と大差なし

明治三十七年乃記

明治三十七年の記

○

比年は修養に勉め世事に離れ随て経済方面は豊ならざりしも全家比較的健康に又極めて幸福に日々を過したり吾第二の著水彩画階梯は比年に於て成り世評最もよく一般水彩画の流行は吾が作りし動機なれば斯道に猶多大の力を尽さんと希ひつゝ、年を越したり

明治三十八年一月 大下藤次郎

日記摘要

- 青梅に於て年を迎ふ○山上に遊ぶ (一月一日)
 春子少しく不快 (一月二日三日) 小水画をかく (一月五、六、七日)
 出京し竹下に泊す○太平洋画会の新年会へゆく (一月八日)
 帰京す (一月十一日) 春子出京す (一月十二日) 春子帰る (一月十三日)
 琴の師来り一泊さる (一月十五日) 小画をかく (一月十八、二十三、二十四日)
 春子一週間の見込にて東京へ眼の治療にゆく (一月十八日より二十五日迄)
 新月の図をかく (二月三日) 小水彩画をかく (二月四、五、六日)
 水彩画日向の図をかく (二月八日) 東菊の図をかく (二月九、十、十二日)
 春子出京一泊す (二月十二日) 菊の図をかく (二月十五日)
 菊の図をかく (二月十六日) 雪の写生をなす (二月十七日)
 菊畑をかく (二月十七、十八、十九、二十日) 海岸の図をかく (二月二十二日)
 出京竹下氏に一泊す (二月二十三日) 内外出版協会へ原稿を渡す (二月二十四日)
 帰宅 (二月二十五日) 小川の図をかく (二月二十七日) 小画をかく (二月二十九日)
 写生にゆき二枚かゝる (二月二十九日、三月一日、三月三日、四日、七日、九日、十二日)
 家に在て絵を直す (三月二日、五日、七日、八日、十日、十一日、十二日)
 東京より三宅氏来り二泊さる (三月三日、四日) 雪の写生をなす (三月十四日) 弥生町より市太郎死亡の報知あり直ちに帰京す (三月十四日)
 帰京 (三月十六日) 写生にゆく (三月十七日、二十日) 絵を直す (三月十八日)
 東京より中村赤次郎氏来る (三月十九日)
 四五の同好と共に■■■に写生行をなす (三月二十一日)
 写生をなす (三月二十二日、二十三日) 草■■■に三四の人と共に写生す (三月二十四日) 東京より森脇氏来り一泊さる (三月二十四日)
 絵を直す (三月二十五日)
 写生をなす (三月二十六日、二十八日、二十九日、三十日、三十一日)
 絵を直す (三月二十七日) 東京より大石五六氏水彩を習ひに来る (三月二十八日)
 絵を直す (四月一日、二日、四日、五日、六日、七日) 写生をなす (四月三日)
 出京竹下氏に泊す (四月七日) 太平洋画会出品の絵をふちに入る (四月八日)
 帰京 (四月九日) 吹上に写生す○絵を直す○大石氏帰京す (四月十日)
 写生をなす (四月十一日、十二日、十三日、十八日、十九日、二十日)

日、二十一日、二十二日)

絵を直す(四月十三日、十四日、十五日、十六日、十七日、二十日、二十一日、二十二日、二十三日)

東京より沢野氏等来り稲吉一家吾家一家共に二股尾へゆき終日桃を見る(四月十一日)

久野氏来り二股尾へゆく(四月十二日)

水彩画階梯成る製本極めて美(四月十五日)

四丁、寛水、珠郎、几水の諸氏と共に写生のため大嶽山に登り御嶽に一泊す(四月二十四日) 写生しつゝ、帰宅す(四月二十五日)

信康来り四泊す(四月二十六日) 絵を直す(四月二十六日二十七日二十八日二十九日)

写生をなす(四月三十日) 松木氏より絵の代来る(四月三十日)

竹下氏渡米送別会のため出京す(五月一日) 帰宅(五月二日)

家に在て絵をかく(五月四日、五日、三日) 写生をなす(五月六日)

木曜会の人々と写生を共にせんため日野へゆく(五月七日)

木曜会の人々と共に青梅に写生す(五月八日)

塩舟に写生をなす○百合を採取す○油絵筆の使用(五月九日)

写生をなす(五月十日) 竹下見送のため出京す○行違ひなりし(五月十一日)

太平洋画会を見る(五月十一日) 絵を直す○帰京す(五月十二日)

絵をかき直す(五月十四日) 春子今日より絵を習ひ始む(五月十四日)

写生にゆく(五月十六日、十七日、十八日、十九日、二十日、二十一日、二十二日、二十三日)

東京より中村氏来る(五月十六日) 絵を直す(五月二十四日、二十五日、二十六日)

信康渡米の筈なりしも眼病のため横浜より帰る(五月二十三日)

山上其他写生にゆく(五月二十七日、二十八日、二十九日、三十日、六月一日、二日)

家族と共に出京長野氏に一泊す春子正男は四谷へとまる(六月四日)

太平洋画会及恤兵展覧会を見る○河合鹿子木両氏の歓迎会へのぞむ

○弥生町にとまる(六月五日) 一家帰宅す(六月六日)

今宵より蚊帳を用ふ(六月七日) 写生をなす(六月八、九、十、十一、十三、十四、十五日)

大阪より山本得兵衛来る(六月九日) 払沢に写生にゆく(六月十四日)

青梅絵葉書会第一回を常保寺に開く(六月十五日)

写生にゆく(六月十六日、十七日、十八日、二十二日) 絵を直す

(六月二十、二十一、二十三日)

気管大いにわるく吸入等をなす(六月二十二、二十三、二十四日)

春子動気、血の道大いに泣き苦しむ医師にかゝる(六月二十五日より七月一日迄)

沼の絵をかく(六月二十八、二十九、三十日) 耳の下腫物を生す(六月三十日)

写生にゆく(七月二日、四日、五日、六日、七日、八日、十七日、二十一日)

東京より信泰来り泊る(七月四日五日) 絵をかき直す(七月十二、十三、十七、十八、十九日)

- 東京より紫水会の連中來り一泊す(七月十五日)
 花蝶会の連中たづね來る(七月十六日) 絵を直す(七月二十日)
 神田高山頼定死亡の報あり直ちに東京す(七月二十二日)
 目黒松本を訪ふ(七月二十三日) 葬式済みて帰宅す(七月二十四日)
 家にて絵をかく(七月二十七日、二十九日)
 写生にゆく(八月一日、八月四日、五日、六日、八日)
 宮嶋より文雄龍雄來り泊す(七月二十二日より)
 家に在て絵をかく(八月二日) 東京より森脇氏來り宗建寺に泊さる
 (八月三日)
 子供達及森脇と共に羽村にゆき遊ぶ(八月五日)
 宮嶋小供帰京す○森脇帰京す(八月六日)
 東京より清子とまりに來る(八月七日) 写生にゆく(八月八日、九
 日、十日) 真野氏來泊さる共に諸処写生にゆく(八月十日)
 写生をなす(八月十一、十二、十三、十四日) 一家及友人達と羽村
 へゆく(八月十四日)
 繪葉書会第三回を開く○真野氏帰京す(八月十五日)
 絵を直し又はかきかへをなす(八月十七日十八日二十日、二十二日、
 二十三日、二十四日、廿五日)
 清子帰宅す○大石五六氏來り稲吉に止宿す(八月二十一日)
 写生にゆく(八月二十九日) 家に在て写生をなす(八月三十日、九
 月一日、二日、三日、五日、六日)
 大石五六氏帰宅さる(九月五日) 絵をかく(九月七日、八日、九日、
 十日、十二日、十六日)
 写生にゆく(九月十三日、十四日、十五日) 繪葉書会第四回あり
 (九月十八日)
 友人等と共に写生旅行をなす飯能を経て原市場に一泊す(九月二十
 三日) 原市場にて写生し雨に逢ひて夜に入りて帰宅す(九月二十四
 日)
 長野氏渡米見送りのため出京横浜へゆき行違ひにて弥生町に一泊す
 ○同日鈴木氏を訪ふ(九月二十六日) 帰宅(九月二十七日)
 東京より小嶋剛四郎君來る(九月二十九日)
 春子病氣医師にかゝる(九月二十九日より十月四日迄) 絵を直す
 (九月二十二日、二十八日、十月一日、三日、七日、八日、十日、
 十二日)
 雜誌英学生の表紙をかく(十月四日) 水彩画階梯再版世に出づ(十
 月六日)
 春子正男を伴ひ出京す(十月七日) 兩人帰宅正男風邪となる(十月
 九日)
 裾風呂を新調して成る(十月十一日) 鹿本中学より絵の注文あり送
 る(十月十二日)
 写生にゆく(十月十四日) 絵を直す(十月十五日、十八日、十九、
 二十、二十一、二十二日)
 繪葉書会あり(十月十六日) 東京より鈴子等三人來泊翌日歸る(十
 月十六日) 東京より大田及巖谷來る(十月十七日)
 写生にゆく(十月二十日、二十三日、二十四日、二十六日、二十八
 日、二十九日、三十日、三十一日)
 絵を直す(十月二十五日、二十六日、二十七日、二十八日、二十九
 日、十一月一日、二日、四日)

東京より真野氏写生のために来泊さる二泊して帰る(十月二十九日) 木葉会の人々と小作に会し多摩川原に写生をなす(十一月五日) 木葉会の人々と共に拝嶋に写生をなす(十一月六日) 絵を直し又新にかく(十一月七日、八日、十七日、二十五日、三十日)

写生をなす(十一月五日、六日、十四日、十六日、十八日、十九日、二十日、二十一日、二十二日、廿三日)

絵葉書会を開く○真野氏来り即日帰る(十一月十三日)

信泰来り一泊して帰る(十一月十五日) 絵を直す(十月二十四、二十五、二十六日)

写生をなしにゆく(十一月二十九日、十二月一日、二日、三日、四日、五日、六日、七日、八日、十日、十二日)

絵葉書会を開く(十二月十一日) 写生にゆく(十二月十四日、十五日、十六日、十七日)

室内にて絵をかく(十二月二十一日二十二日) 宮嶋母来る一泊して帰る(十二月十九日)

春子正男出京二泊し帰る(十二月二十一日)

出京諸処訪問し山縣氏宅にて奥田氏に逢ひ一泊す(十二月二十六日)

諸処用達をなし弥生町へゆき一泊す(十二月二十七日)

小田原へ旅行光円寺に投す○原田氏を訪ふ(十二月二十八日)

海岸の写生をなす(十二月二十九、三十、三十一日)

○経過

新年を青梅に迎へ歳晩を小田原に送りこの年撈々敷(はかばかし

き) 旅行せず唯時に青梅のアマチュア達と共に一泊遠足旅行を試みしのみ 新春より初夏の頃迄夜間多く水彩画階梯の著作に費したり 油絵筆を水彩画に應用せしは比年よりにして一二時間のスケッチ数多く製作したり

○健康

前半年には一度医師の診察を受けたり慨して健康なりしが猶時に風邪のため軽微の頭痛を催すことありし春子の眼病は二月の頃漸く治愈せり例の動気は婦人病に原因せりとて二三回東京水原氏の診察を受けたり猶青梅に在て数回医師にかゝりたり正男極めて壮健春来齒痛を訴へしも僅かの治療にてすみ十一月種痘を試みしも感ぜず一ヶ年終に医師の治療を受くる程の病を得ざりし

○読書

主として見たる新聞は読売新聞、万朝報、雑誌は美術新報、文庫、家族の友、ハガキ文学の類にて帝国文学も松木氏郵送の間盗見せり書物にはうつぼ物語、紅葉全集、藤村詩集其他数種なり友人山縣氏英学生を発刊されしをもて是又常に目を通せり

○学事

水彩写生百二十八枚複写四十八枚記憶三枚画架に向ひし日式百四十日七日間戸外写生百三十日なり
水彩画階梯を出版し猶外遊雜感に執筆す
春期太平洋画会へ十五枚出品秋季日月会へ六枚京都関西美術会へ拾

式枚出品せり

○経済

収入金四百五拾貳円六拾參銭支出金四百七拾壹円六拾六銭所有財産は前年と大差なし

正男日記

青梅にて新年を迎へ父上秋山姉さんと共に北斗山に登る（二月一日）
食慾烈しく父母心配さる（二月頃）

母上東京へゆかれ一週間の留守を青梅にて父上と共に在りおとなしとて皆々にほめらる（二月十八日より二十五日迄）歯大にいたむ（二月二十一日）

少しく風邪、一兩日にして治す（二月二十三日）

食事毎に齒のいたみを覚ゆ（二月中）

多食のため時に苦き水を吐く○今朝より塩湯を与ふ○稲葉さんより頂きし劍をさげて兵士の身振して喜び遊ぶ（三月五日）

アメリカなる松木氏より美しきカードをいたゞく（三月十日）

宅より四丁程山根の家へ始めて一人にてゆく（三月十二日）

戦争のため武装す諸処より貰ひし旗、劍、双眼鏡、鉄砲等を身につく朝には各国の旗及提灯行列あり（三月末）

東京より沢野氏来られいろいろ弄び物を頂く○父母其他の人々と共に二股尾へゆく桃の名所往復二里程を洋服にて歩行す（四月十一日）

鉛筆もて汽車の図をかく巧なりとて人々に賞さる又自己の名前大下正男と明かにかくことを得（四月中）

便所に在て居ねむりせりとて人々に笑はる（四月二十八日）

水彩絵具を母上に頂き父上と共に庭に牡丹を写さんとす（四月三十日）

父上早朝河原に写生にゆかるゝによりあとつきてゆく（五月末頃）
人形の着物をせん濯して乾して遊ぶ○鶴沢百千さんと毎日仲よく遊ぶ○まゝ事をよくす○言葉段々あしくなる（六月頃）

父上に伴はれ金剛寺のほとりに蓮華艸をつむ○百ちゃんに持つてゆく米ちゃんにも一束を送る（五月三十一日）

父母と共に出京し二泊して帰る（六月四日、五日）

モ、ちゃんの家にて太鼓より墜ち額をうち少しく傷く（六月十八日）
いたづらと足元不注意にて道路にころび着類をよごす事頻（六月中）
沼田さんよりハーモニカ送り来る（七月十日）

この頃朝は六時頃に起きいで夜は八時にねむる（七月中）

東京より文雄龍雄清子等のよきお友達来れるをもてあるいは拝嶋へ又は異河原、千ヶ瀬等へゆき水に入り小魚をあさる（七月八月頃）
々々写生をなす国旗提灯の形はよく出来る（八月頃）

ウ沢氏の人々及大石氏に伴はれて日向和田の祭礼にゆく（九月一日）

父上の兼ての貯金を出して貯蓄債券二枚を求めらる（九月二十五日）

母上と出京風邪となる一兩日にして治す（十月八日より十二日）
豊田氏より衣物頂く（十一月二十二日）種痘す感ぜず（十一月二十日）

父上の写生の場処へゆき共に写生し且遊ぶ（十二月初旬）

母上と共に出京す（十二月二十一日）雪の迎等を独りにて歌ふ（十二月中）

○親戚及交友

弥生町大下家にては三月長男市太郎を失ひ高山家にては七月当主頼定死亡す○大崎松本家は池田侯の職を奪はれ邸を去て白金に住す二月以来肺を病みて年を越せども快愈せず○四谷宮嶋家砲兵工廠の用達をなし年末大いに景気よしとの事母は不相変の情体なり政子信康一時職を執れり信康は例の歯科医を辞して竹下氏と同行渡米の筈なりしも眼疾のために意を果さず○秋山敬子は十二月末より青梅小学校に教鞭を執ることなれり

交友竹下氏は五月渡米し長野氏は九月渡米せり山縣氏は英学生を出して大いに評高し他の諸氏不相変なり新に得たるもは巖谷小波同春生、大田南岳、筒井年峰、西岡英男等の諸氏なり

○雑事

訪問百三十度来訪者三百十三名発信六百九十八通来信七百三通

※判読できなかった文字は■で表した

〔論考〕

本稿では前回に引き続き、大下藤次郎の日記のうち明治三十六年から三十七年分に記された内容を紹介した。

大下は石川寅治と共に明治三十五年の十月に渡米し、三十六年の正月をボストンで迎えた。「日記摘要」欄に「△」の印を付して書かれた項目は、大下が外遊中の日本の家族の動向である。妻、春子に日記をつけるよう言い残していたのであろうか。相変わらず几帳面なことである。

大下と石川は、一月二十三日にはバッファローで、二月十四日にはデトロイトで水彩画展を開催した。二月二十二日に晩餐に招かれたフレヤという人物は美術品のコレクターで、大下はここで見た絵画について「フレヤ氏の蒐集品」と題したエッセイに記し、後に雑誌『みづゑ』六十号（明治四十三年三月）に掲載した。アメリカ滞在中の制作記録としては、ボストン滞在中の一月十三日とデトロイト滞在中の二月二十六日に「蓮の図を描く」という記載があるが、どのような作品であったかは分からない。冬期なので現地で写生したと考えるよりは、大下というところの「複写」、「想像画」、「記憶」など、スケッチや記憶にもとづいて描いた絵と考えた方がよいのではないか。いずれにしても米国滞在中の制作と確定できる作品は、現在確認されていない。なお、「学事」欄に「米国に於てはパフワロー及デトロイトに於て沢山の水彩画を売却せり」とあり、大下と石川が作品の売却によってまとまった資金を得てヨーロッパに渡ったことが分かる。まずアメリカで作品を売って資金を稼ぎ、ヨーロッパへ向かうのは三宅克己以降、多くの日本の水彩画家たちがとった

手段であった。

ヨーロッパではリパブル、ロンドン、そしてパリに滞在し、主に美術館を見学して回った。絵を制作した記録は日記になく、またこれらの都市の風景を描いた作品も遺されていないため、ヨーロッパ旅行の目的は同地の美術館や名所巡りなどにあったと思われる。パリでは当時留学していた和田英作、河合新蔵、鹿子木孟郎らに会っている。

欧米旅行での体験がその後の制作に与えた直接的な影響は、日記からも作品からも読み取ることができない。しかし三十六年の日記の冒頭には「外遊によつて新なる希望を得しと共に更に一段の修養を要すべく深く感ぜしため帰朝後直ちに新の道に進みて比年を送れり」、「請ふ三年後の活動を見よ」と記されており、大下にとつてはひとつの転機となったことが分かる。「帰朝後直ちに」始めたことといえば、渡米前から盛んに行っていた風景写生のほかは、『水彩画の栞』の改訂版となる『水彩画階梯』の出版準備である。これは推測だが、大下が外遊で感じたのは水彩画の歴史の厚みではないだろうか。自らの技術については、アメリカでの展覧会の成功によつて自信を得た上で、引き続き精進して「さらに一段の修養」を積むことを決意した。それと同時に、日本でも欧米並みに水彩画を広めたいという新たな課題を見つけたのではないだろうか。「三年後の活動を見よ」とは、自らの制作ではなく、水彩画専門雑誌『みづゑ』の発行、水彩画研究所の設立、そして全国各地での水彩画講習会の開催といった水彩画普及事業を予告しているように思われる。

さて、帰国した大下は東京にいた家族を伴い、すぐにまた青梅に

居を構えた。この年は近隣の風景を写生して過ごしたようだ。「聖博出品の植物園の図をかく（十月二十二、二十三、二十六、二十七、二十八、二十九、三十日）」とあるのは、翌年開催されたセントルイス万博への出品作品のことで、十二月二十六日に「聖博出品画二枚共鑑査通過の報に接す」と記されているとおり、二点が採択された。出品目録によると「秋ノ庭園」、「夕陽」と題した二点だが、どんな絵であったかは不明である。ちなみにセントルイス万博に「西洋画」として出品されたのは十八名の画家による二十八点だった。この中に大下の作品が二点が選ばれていることは、当時の洋画界で実力を認められていたことの証といえよう。

ほかに注目されるのは九月二十一日の「毎日絵葉書をかく」という記述である。日本の絵葉書の流通は明治三十三年の私製葉書認可に始まり、三十七、八年の日露戦争時に流行が頂点に達したとされている。名所や行事、戦争記念などの絵葉書が大量に制作され流通した。大下が原画を手がけた絵葉書（図2、3）も多数出版されたようだ。また、葉書大の水彩作品（図4、5）も残されており、これらは絵葉書の原画として描かれたものではないかと推測される。ただし、葉書大の作品の中には雑誌『みづゑ』の口絵や挿画に使われたものもあり、それが絵葉書でそれが『みづゑ』のための原画として作られたものかという判別は難しい。また前者が後者に使い回される、あるいはその逆という可能性も考えられる。

ともあれ、これ以前の日記には絵葉書についての記録はないため、絵葉書の制作を始めたのは三十六年頃と考えてよいだろう。翌三十七年の日記には「絵葉書会」を開いたという記述が現れ、この年だ

けて六回の絵葉書会が記録されている(第一回の次に表れる記述が第三回となっているため、実際にはこの間にもう一回開催され、少なくとも七回行われていたと考えられる)。大下の絵葉書制作開始時期がちょうど日本における絵葉書ブームと機を一にしていることから、大下がその盛り上げに一役買っていたといつてよいだろう。

明治三十八年七月創刊の雑誌『みづゑ』第一号の巻末には日本葉書会主催の絵葉書品評会や春鳥会(『みづゑ』の発行元)の絵葉書競技会といった催しの記事や、盛文堂書店発行の大下藤次郎絵葉書の広告などが掲載されている。春鳥会の絵葉書競技会は、課題に沿った自筆の絵葉書を持ち寄り、または郵送し、一等の作者には二等の作品が、二等の作者には三等の作品が与えられるという仕組みだったようだ。一等の作品は春鳥会に保管され、絵葉書として出版されることもあった。こうした絵葉書会は、明治三十六年に大下が始めた会を元に発展していったと考えてよいだろう。

なお、この年の日記には九星の遁甲盤のようなもの(図1)の挟み込みがあるが、日記本文と直接の関係はなさそうである。筆跡は大下のものと考えられる。転居に際して方角などを気にして用いたものだろうか。

翌明治三十七年の出来事の中では、『水彩画階梯』を四月十五日に刊行したことが、大下にとって一番大きかったようだ。この年の日記冒頭には「吾第二の著水彩画階梯は比年に於て成り世評最もよく一般水彩画の流行は吾が作りし動機なれば斯道に猶多大の力を尽さん」とあり、ますます水彩画の普及事業に熱が入ったことが分かる。十月六日には再版がかかるという売れ行きで、大下は出版によ

る水彩画の普及に大いに自信を持ったことだろう。

この年は遠方への写生旅行はせず、ほぼ青梅で過ごし、同好の士や家族と近隣に出かけ風景の写生を楽しんだようだ。制作上の記録としては、「油絵筆を水彩画に応用せしは比年より」、「一二時間のスケッチ数多く製作したり」という記述が注目される。この年に描かれた作品《青梅》(図6)、《寄居》(図7)などは、粗い筆致で対象を大掴みにした部分があり、これらが油絵の筆で描かれたものと考えられる。一方、「一二時間のスケッチ」に該当するものを現存作品から特定することはできないが、短時間で仕上げるスケッチを数多く描いたため、「水彩写生百二十八枚」、「画架に向ひし日式百四十七日間」、うち「戸外写生百三十日」という例年になく多作の年となった。もちろん写生による修練だけでなく、展覧会出品も意欲的に行い、「春期太平洋画会へ十五枚出品秋季日月会へ六枚京都関西美術会へ拾式枚出品」という結果を残している。出版事業やアマチュアへの指導を行いつつ制作もますます盛んとなったこの年は、いよいよ多忙を極めたためか、日記の記述が「写生をなしにゆく(十一月二十九日、十二月一日、二日、三日、四日、五日、六日、七日、八日、十日、十二日)」というように、写生地や日付を詳細に記した従来の記述に比べてかなり簡略化されている。

「交友」欄で注目されるのは、俳人で画家の大田南岳と、児童文学者の巖谷小波である。この二人と大下を含め十人で拜島に写生旅行に行った明治三十七年十一月六日撮影の写真が残されており(図8)、十一月六日の「木葉会の人々と共に拜嶋に写生をなす」という記述と合致する。木曜会(木葉会)は、巖谷小波が主催した文学

者の会である。五月七日、八日の記述では「木曜会」、十一月五日、六日の記述では「木葉会」となっているが、同じ団体を指すものと考えてよいだろう。ちなみに、『みづゑ』創刊号に掲載された日本葉書会主催の絵葉書品評会の報告によると、南岳と小波の両人が評者に含まれている。文学者や美術家が、写生会や絵葉書会といった文化サークルを通して交流を深めていたことが分かる。

さて、本連載でとりあげた一連の大下藤次郎の日記は、この年までとなっている。よって、日記の紹介は今回が最終回となる。明治三十八年、三十九年については当館の所蔵資料に日記の類はなく、この後のものとしては明治四十年二月十二日から四十二年一月一日までつけられた絵日記が存在する。三十八年に雑誌『みづゑ』を創刊し、三十九年からは各地での水彩画講習会を始めるなど事業が多忙を極めたため、これまでのように詳細な日記を編集、清書する時間がとれなくなったのだろうか。三十八年以降は、『みづゑ』に数多く文章を掲載しているため、写生旅行のや水彩画普及事業については、これらの資料から知ることができる。

これまで五回にわたり、明治二十三年から三十七日まで十五年間にわたる大下藤次郎の日記を紹介してきた。大下藤次郎の制作や旅行の記録、交友録のみならず、読んだ本や経済状況、家族の様子までが分かる、極めて貴重な資料である。大下藤次郎研究のみならず、明治時代の美術、さらには明治時代の生活文化について調べる際に活用されることを願っている。毎回、日記の翻刻に続いてわざわざかばかりの考察を行ってきたが、いずれも十分ではなく、重要な事

柄を見落としている可能性も高い。作品やほかの文献資料と照らし合わせることで判明する事実も多いことと思われる。お気づきの点があれば、ぜひご教示いただきたい。

本稿の元となった日記は、ご遺族より当館に寄贈されたものである。大下家の皆様、また株式会社美術出版社には様々な形でお世話になった。改めて感謝申し上げます。

当館ではご遺族から譲り受けた大下藤次郎の日記、手記などを他にも多数所蔵している。そのリストは『島根県立石見美術館研究紀要第1号』（二〇〇七年）および、『大下藤次郎の水彩画 島根県立石見美術館所蔵大下藤次郎作品集』（美術出版社、二〇〇八年）に掲載しているので、そちらを参照されたい。これらの資料についても今後、何らかの形で紹介してゆきたいと考えている。

（当館主任学芸員）



図1 挟み込みの紙

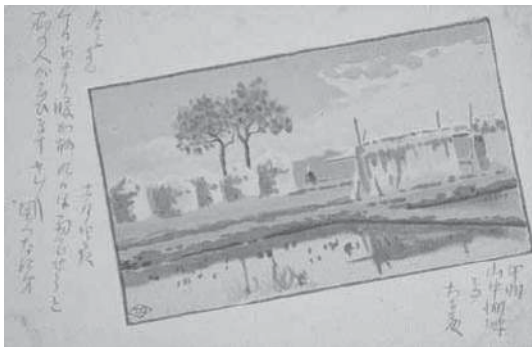


図3 大下藤次郎原画の石版絵葉書 発売元不明
消印明治41年11月5日 大下春子宛



図2 大下藤次郎原画の石版絵葉書「拝島の秋」
日本葉書会製 東京博文館発売
発信明治41年11月1日 大下春子宛

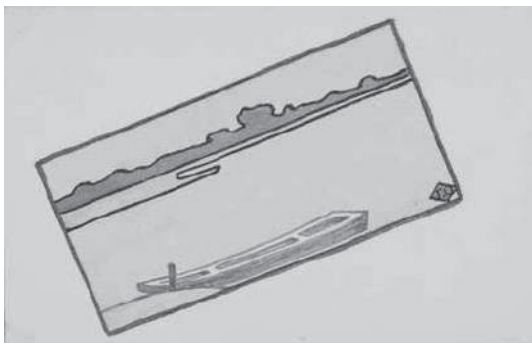


図5 《舳う》 制作年不詳
水彩、紙 8.8×14.4cm



図4 《船のある風景》 制作年不詳
水彩、紙 9.1×14.2cm



図6の部分拡大



図6 《青梅》 明治37年
水彩、紙 33.4×21.4cm



図7の部分拡大



図7 《寄居》 明治37年
水彩、紙 22.4×34.1cm



図8 西多摩、拝島に於て 明治37年11月6日
(前列右より巖谷小波、岡野栄、大田南岳、
中列右より大下藤次郎、中沢弘光、鶴澤四丁、
後列右より渡中開成、濱嶋寛水、巖谷春生、
小林珠郎)

※掲載作品、資料の所蔵は
いずれも島根県立石見美術館

明治期の出雲焼 — 出雲・布志名焼の輸出陶器の変化について —

河野克彦

はじめに

出雲焼は、江戸時代に出雲国松江藩内にあつた楽山焼と布志名焼を指すが、現在では広く島根県出雲地方の陶磁器の総称として使うことも多い(註1)。そのうち布志名焼は、松江市玉湯町布志名の近辺で焼かれる陶器である。藤原隆「出雲の雅陶 布志名焼」では、布志名焼の歴史を以下のように大きく四期に分けている(註2)。

草創期 寛延三年頃(一七五〇)から安永九年(一七八〇)まで

(船木村政の開窯から土屋善四郎芳方の布志名移住まで)

発展期 天明元年(一七八一)から明治維新(一八六七)まで

(藩窯を中心にした雅陶時代)

最盛期 明治期から大正初年まで

衰退から新しい時代へ 大正初年から現代まで

本稿では、このうち「最盛期」とされる明治期の布志名焼をとりあげる(図1)。明治期、布志名は「輸出陶器」と呼ばれる欧米への輸出を目的とした高級品を中心に、近代化をすすめる生産量も増やした。そうした点からこの時期は、布志名焼の「最盛期」といえる時期だったのである。その背景には、十九世紀後半からの欧米での

ジャポニズム(日本趣味)の流行がある。日本の美術工芸品が大量に海外に渡り、欧米に日本美術のコレクションが形作られたのである。また明治政府も殖産興業政策の一環として美術工芸品の輸出拡大をはかった。なかでも陶磁器は日本の重要な貿易品であった。明治期の島根県では、出雲地方と石見地方にそれぞれ陶磁器の産地が形成されていたが、特に出雲地方で生産された出雲焼は、こうしたジャポニズムの流行にともない、欧米に盛んに輸出されるようになる。

「最盛期」とされるこの時期の布志名焼について、これまで十分な研究はなされておらず、とくにその製品の変化を体系的に述べたものはない。本稿では明治時代の布志名焼について主に『大日本窯業協会雑誌』の記事を参照しながら、三期に分け論じる(表)。窯業関係の専門誌『大日本窯業協会雑誌』は明治二十五年(一八九二)に創刊され、その地方通信のページは当時の布志名焼の様子を知る貴重な資料になっている。出雲では明治期の出雲焼の中心人物のひとりであつた澤喜三郎が通信員として、明治二十九年から明治三十三年頃まで布志名焼を中心に窯業についての報告を掲載している(註3)。

表 明治期の布志名焼における主な出来事

前期	明治初年～明治二十年（一八八七）
明治九年	フィラデルフィア万国博覧会出品
明治十年	第一回内国勸業博覧会出品、「若山」と改号、 工商会社と特約を結ぶ
明治十三年	若山陶器製造会社を組織する
明治十四年	第二回内国勸業博覧会
明治十五年	工商会社との特約解消
明治十六年	若山陶器製造会社破社
中期	明治二十一年（一八八八）～明治三十二年（一八九九）
明治二十一年	若山製陶舎による陶質の改良
明治二十三年	第三回内国勸業博覧会出品
明治二十五年	釉下彩による製品を開発、第四回内国勸業博覧会出品
明治二十六年	シカゴ・コロンプス世界博覧会出品
明治二十八年	出雲国布志名陶器業組合を組織
明治三十一年	陶器業組合が伝習所を組織
後期	明治三十三年（一九〇〇）～明治末年
明治三十三年	パリ万国博覧会出品
明治三十五年	伝習所が試験場に改称
明治三十六年	第五回内国勸業博覧会出品



図 1-2 澤喜三郎、澤虎之助、福島又兵衛、永原英助



図 1-1 船木健右衛門



図 1-4 岩倉源蔵



図 1-3 船木浅太郎

川崎源太郎『山陰道商工便覧』明治20年(1887) (だるま堂限定版叢書第二巻 昭和53年(1978)) 島根県立美術館蔵

一 前期（明治初年～明治二十年）

明治四年（一八七二）の廃藩以前、布志名には船木をはじめとする十指にのぼる民窯と、土屋、永原の二軒の藩窯があった。民窯では水瓶、壺、鉢皿、杯等の日用品を製作し、藩窯では藩主及び藩の御用品を製作していた（註4）。藩窯の御用品は主として茶器、花器等の上等品であり、なかでも黄釉の陶器は藩窯でしか製造できなかった。

明治になるとかつての民窯でも黄釉のものが作れるようになり各自の窯は、それぞれに黄釉の上等品の製造を始めた。しかし社会体制の変化により、はじめはこうした「錦手模様の類或は茶器之如き風雅之器」のような上等品の販路は少なかったが、明治九年（一八七六）に、布志名の各窯は上陶器製造に再び着目することになった（註5）。おそらく、この年アメリカで開催されたフィラデルフィア万国博覧会と、翌年の第一回目の内国勸業博覧会への出品が、そのきっかけだったと思われる。万国博覧会への参加や内国勸業博覧会の開催は、当初明治政府の勸業政策の重要項目であり、政府はこうした博覧会で優良品の選定と品質の向上を図ったのである（註6）。

フィラデルフィア万博は、アメリカでのジャポニズム流行に大きな役割を果たした博覧会で、ここに布志名焼の陶器も出品された。当時、日本の美術工芸品は欧米で高く評価されており、この時出品された出雲焼は、現在イギリスのヴィクトリア・アンド・アルバート美術館に収蔵されている。十九世紀末から二十世紀前半にかけて優れた美術陶器で世界的に有名になったアメリカのルックウッド・ポタリーは、こうしたジャポニズム流行の時期に誕生した日本風の

陶磁器を製造した製陶所である（註7）。後述するようにその初期に布志名焼の影響を受け、さらにその後、逆に布志名焼がルックウッドの釉下彩技法を模した製品を製造することになる。

フィラデルフィア万博の翌年、明治十年（一八七七）の第一回内国勸業博覧会にも、布志名の全業者は協力して作品を出品した。『明治十年内国勸業博覧会報告書』では布志名焼の評価はそれほど高くないが、海外向上陶器を製造することを勧めている（註8）。

また『大日本窯業協会雑誌』に掲載された布志名焼の窯元による「陶器履歴書」（明治十二年）の写しからも、内国勸業博覧会の開催された年の冬に、再び上等品の製造を始め、布志名は「若山」と号したことが分かる（註9）。

博覧会への参加を通じて上等品を海外へ輸出することを目指すことになった布志名は、「工商会社」と特約を結ぶ（註10）。また明治十三年（一八八〇）には、布志名の窯業者がみな団結して「若山陶器製造会社（若山会社）」を組織する（註11）。若山会社の時代、布志名は金釉、錦彩画を施した製品を製作し、それまでにない好況を迎えた。こうした製品の七～八割が輸出品だったようだが、陶器への絵付けは、布志名でなされていたと思われる。例えば、布志名焼の職人だった田中史好は、この時期のことを『布志名焼集説』で下記のように述べ、永原、土屋をはじめとする布志名焼の名工に加えて、地元の名工の名前も挙げている（註12）。

「（前略）在来製出せらる美麗なる器を製出せり。此時代を後世会社時代と称して其隆盛なりし事を物語り居れり。布志名焼創業以来の全盛期とでも謂う可きなり当時名工多く集いて細工人にては窯元

主人を始め、永原永助、同永造(図2)、同由五郎、船木藤平、土屋伝太郎、入澤儀一郎等また画工には小村義右工門(成章)、恩地定太郎(山涛)、菅井小三郎等二十余人の画工之に従事して互に技術を磨き以て腕くらべとも云う可く製品の精巧実には其極に達せしなり 土屋伝太郎翁談(註13)

若山会社は、明治十四年(一八八二)の第二回内国勸業博覧会に出品し賞を受けたが、その出品目録の若山陶器製造会社の項には、作者として永原英助、船木良右衛門、澤大一郎、土屋伝太郎、澤虎之助、船木樽之助(図3)、永原由五郎の名前が見られる(註14)。

一方で、『大日本窯業協会雑誌』に掲載された澤の記事では、この時期にはまだ製陶の技術が拙かったことが伝えられている。布志名では工場を改築し土漉機械を設け就業時間を更正したが、原料、焼成も良くなかったため、製品としての完成度が低かったようである。また工商会社の経営状態も悪化しており、明治十五年(一八八二)に工商会社との契約が解かれ、翌年、若山会社は破産する。布志名では再び窯元が個別に製品を生産するようになった(註15)。

つまり、この時期の布志名は共同で会社を設立し機械を導入するなど近代化もすんだが、まだ幕末からの流れのなかで製品を生産していた。そしてその輸出向けの上陶器を製造する際に指導的な役割を果たしたのが、江戸時代、藩窯で上手物を制作していた土屋と永原と考えられる(註16)。



図3 船木樽之助《布志名焼 珈琲器》明治時代前半 島根県立美術館蔵
「出雲若山」印



図2 永原永造
《布志名焼 色絵金銀彩唐文鉢》
明治時代前半
島根県立石見美術館蔵

二 中期（明治二十一年～明治三十二年）

明治十六年（一八八三）の若山会社の破産後、布志名焼は一時低迷した。その後、船木健右衛門と澤喜三郎が設立した若山製陶舎が中心になって、明治二十一年に布志名焼の改良が行われることになる（註17）。それまでの布志名焼は現在の雲南市加茂町三代の粘土に、松江市鹿島町の手結浦の土を混ぜて製造していたが、質が悪く、籾入、水の浸透する欠点があった。そのため製陶舎は手結浦の土にかえて松江市玉湯町大谷の石を配合して陶質を改良したのであった。さらに明治二十二年には、後の釉下彩の導入の際にも大きな役割を果たした素焼窯を新たに築造している（註18）。

こうして陶質を改善した布志名は無地流釉などの製品により、再び生産を増やした。明治二十三年（一八九〇）の第三回内国勸業博覧会にも出品し、販路の拡大をはかっている。しかし、布志名では無地流釉等の品のみを製作し、これを京阪地方に送り水金等で描画して輸出したものが多かったようである（註19）（図4、図5）。そのため布志名では利益がなく、また粗製濫造により再び不振に陥った。これについて田中史好は、下記のように給付は京都の絵具を使用していたと記しており、布志名でも幾分は給付がなされたことも考えられる（註20）。

「（前略）給付けに於いても上絵と称して焼出したる陶器の上に着画せしものにて当時より初めて製出す。此時代の絵具は京都より仕入れたるものにて絵具盛上がりて何となく品位を保てり。あまつさへ金銀を濃ゆく使用して書いたる絵画なれば其華美なる事薩摩錦欄手に似て最も高尚美なる事布志名焼開窯以来未曾有の陶器を製出せ

しなり。その昔土屋善四郎等が不昧公指導に依って焼出したる雅趣に富み居たりし布志名焼も此時全く一変して華美専念に心懸ける様とはなりしなり。」



図5-1 《布志名焼 色絵金彩花鳥文花瓶》
明治時代 島根県立美術館蔵
「出雲若山」「大」印（船木浅太郎の灘船木窯の印）



図4-1 《布志名焼 色絵花鳥人物図花瓶》
明治時代 島根県立美術館蔵
「出雲若山」「大」印（船木浅太郎の灘船木窯の印）

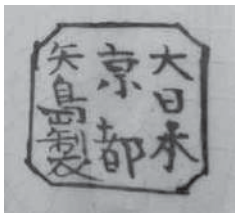


図5-2 部分「大日本京都矢島製」朱書銘

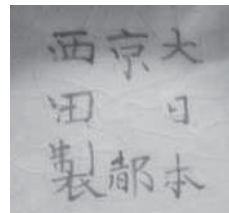


図4-2 部分「大日本京都西田製」朱書銘

再び低迷することになった布志名は、その後、明治二十五年（一八九二）に澤喜三郎が釉底彩料を開発し、釉下彩の製品を製造することで息を吹き返した（図6、図7）。これはルックウッド・ポタリーの釉下彩製品を模したものだ（註21）。十九世紀末、日本の陶芸は欧米の陶芸から大きな影響を受けていた。特に日本の伝統的な上絵付けと異なり、透明釉の下に絵付けをする釉下彩は、明治三十年代を中心に注目を集めることになった（註22）。布志名の釉下彩の導入は、こうした状況の中で比較的早い時期になされたことがわかる。澤は釉下彩導入後の布志名の活況を次のように伝えている（註23）。

「ロクウッド風之陶器（釉下彩画入）発明以来益々好評を博し内国需用品及び輸出品共漸次産額を増来る職工稀少にして殆ど注文の六七分位より製出すること能はず為めに他より職工を招聘するも優等職工は他邦に出職する者なく故に地方徒弟を募集伝習し事業拡張に熱心し漸々好運に向ふ方なり」

一方のルックウッドは、その設立の初期に出雲焼の影響を受けていた。下記はルックウッドに勤めていた日本人画工白山谷による入所の際の様子である（註24）。

「当時同所には二三人しか居らなかつたそうして其時拵へた品物は恰も日本の出雲焼に似たものでありました。それはどういふ訳で出雲焼に似たものを拵へたかといふと、日本で大学の創立された当時招聘されて来たモースと云う人が、日本滞在中に各種の陶磁器を多数集めて之れを本国に持ち帰った。今でも其人の品物はボストンの美術館にあります、有益なる研究資料に供せられて居りますが、

それをどういふ関係からか存じませんが当時米国シンシナチ州で有名な金持の娘であつて、当ロクウッド製陶所の創立者たるストアと申す夫人が此のモース氏より種々の話を聴き、就中出雲焼に多大の趣味を持つて、遂に之が模造を企つるに至つたのであります。」

白山谷がルックウッドに雇用されたのは一八八七（明治二十年）で、エドワード・モースがシンシナティで講演し、マリアに出雲焼を含む日本陶器のコレクションを売却したのは、その前年である（註25）。つまり、モースによって出雲焼を見たルックウッドが、その後釉下彩の技法によって逆に出雲焼に影響を与えるようになった。その間は、わずか六年ほどである。ボストン美術館所蔵のモース・コレクションのカタログによると、モースのコレクション中の出雲焼は明治期のものも若干存在するが、殆どが江戸時代のものである。またルックウッドの釉下彩の製品を、澤喜三郎をはじめとする布志名の陶工がどのようにして知ったのかは明らかではないが、布志名の陶器に上絵付けをしていた京都をとおして知った可能性があるだろう。

この新製品開発の中心人物だった澤喜三郎と船木健右衛門が共同して設立した製陶舎について、田中史好は下記のように記している（註26）。

「（前略）船木健右衛門氏は澤喜三郎氏と事業を合併して製陶舎を組織創立せり而して澤喜三郎氏事務兼職長たれば同社の製作品は特に一等地を抜く精巧なる高級的藝術品なる観ありたり。内外国に於て開催ありし博覧会及び各共進会等に出品し其都度幾多受賞を得たる名実共に備る名譽ある工場なり。当時同業家製品の技術上に比す

れば其懸隔大なるものありて同業者の製品は実に粗製なりと云ふもまた故なきにあらざる也。」

例えば釉下彩導入の翌年の明治二十六年（一八九三）の日本美術協会展では、船木健右衛門と澤喜三郎の花瓶が三等銅賞（註27）、さらに同年にアメリカで開催された万国博覧会であるシカゴ・コロンプス世界博覧会でも同様に船木と澤の花瓶が賞を受けている（註28）。また明治二十八年の第四回内国勸業博覧会にも船木と澤は釉下彩の作品により授賞したのだった（註29）。

こうして釉下彩の技法により名声を高めていた布志名に、明治二十九年（一八九六）工科大学生大築千里が調査に訪れた。この時の調査について大築は地元紙「山陰新聞」の記事で下記のように述べている（註30）。

「布志名焼は今貿易品其大部を占め一種黄釉愛すへき色澤を有して居る又一種黒褐色光沢充分得も云われぬ雅味を有する品もある其製品多くは下絵（下絵とは釉薬の下に絵附せるものを云う）にして上絵の器物は甚だ少い殊に多くの水金を用て塵俗なる模様を描かないのは布志名焼の古趣味を存し予の大に同意するところである」

釉下彩技法の開発からわずか四年後であったが、この時にはすでに釉下彩の製品が多く、また輸出向の陶器がその製品の大きな部分を占めていたことがわかる。また澤の報告によれば、当時の布志名焼の販路景況は下記のようなであった（註31）。

「上陶器は近來英米国の嗜好に適し販路大に広まり各自輸出品を製造するに至り内国需用者の供給を欠き例せば内地向き茶具類の如きは殆ど皆無と言はざるを得ず其他粗陶器も影響を蒙り価格騰貴し

近年の衰退を挽回するに至れり」

上等品をイギリス、アメリカに輸出していたが需用が多く国内向けの製品の生産が間に合わない様子がわかる。

再び勢いを取り戻した布志名の陶器製造者は、明治二十八年（一八九五）に、出雲国布志名陶器業組合を結成した。組合長は船木健右衛門、委員は澤喜三郎、船木浅太郎、福岡兼太郎である（註32）。

その後この生産者の組合は、県からの補助金を受け、明治三十一年に伝習所を設立した。田中史好によれば伝習所は下記のような建物であった（註33）。

「若宮神社の隣接地を借用し即ち新式なる総硝子窓附校舎風なるもの一棟を建築して是に宛てられたり。出雲陶器伝習所と称す内規として技師一名徒弟数名小使一名とす。」

これは地元の職工徒弟を養成する機関であったが、なかでも絵付を改良することがその設立の目的であった（註34）。つまり釉下彩が主流となったため、地元の画工による絵付を改良していく必要が生じたのである。こうした陶器画の作風は、欧米のジャポニズムにもこたえる日本風のものであった（註35）。

しかし、伝習所が設置された年、布志名の陶器製造は大きな打撃を受けた。外国への製品の輸出が途絶えたのである。澤はその理由を「経済界の不振」としている。しかし、国内での出雲焼の需要は多く、その後、布志名は国内向けの日用品の製造によって生産量を増やしてゆくのであった（註36）。



図7 《布志名焼 色絵双鶉図花瓶》
明治～大正時代 個人蔵
「出雲」「大」印（船木浅太郎の灘船木窯の印）



図6 《菊図マグカップ》明治時代 個人蔵
「製陶舎」印（船木健右衛門、澤喜三郎による製陶舎の印）

三 後期（明治三十三年～明治末年）

明治三十年代以降、布志名では国内向けの製品に製造の重点を移してゆくが、一方で輸出陶器の製造も続けられていた。例えば明治三十三年（一九〇〇）のパリ万国博覧会に、布志名は充分な準備をして臨んだ。前年に出雲陶器業組合は、明治期の窯業界の重鎮だった塩田真を招き、「陶器製作改良上に関する講話」および「仏国巴里万国博覧会出品に関する協議」を行っている。この際の塩田の講話は、下記のようなであった（註37）。

「日用品の如きは価の安廉にして質硬鞏なる磁器に如くことあらん寧ろ粗雑なる日用品は他に譲り価の高く品格の高き裝飾用精巧品を以て出雲窯の目的とし親切丁寧其名声を博取せんこと当山の主眼と為さざるへからず」

しかし、パリ万博では、布志名焼は明治二十六年（一八九三）のシカゴ博のように賞を得ることは出来ず、出雲では楽山焼の長岡が賞を受けただけだった（註38）。パリ万国博覧会は日本の工芸全体にとっても大きな転機となった博覧会であった。アール・ヌーヴォーが出現し、その新しいデザインに衝撃を受けたのである。布志名焼の欧米輸出が低調になったのも、こうした欧米での趣味の変化が、その一因であつたろう。一方でこの博覧会に出品したルックウッド・ポタリーは、グランプリを授賞している（註39）。またこのころから、布志名では船木浅太郎による新しい製品が開発されるようになる（図8）。例えば、パリ万博と同年に開催された日本美術協会の展覧会では、浅太郎は下記のような花瓶を出品した（註40）。

「船木浅太郎氏の辰砂釉とて赤色なるもの、発明釉とて黒緑色なる

もの等を施用せる布志名花瓶の中濃釉下に薄肉模様を置きて淡色を現せるもの及び濃陰色の光沢釉上に古代模様を銀描せるもの等は同陶に取りて好結果を奏すべき方法と見ゆ但し銀描の草画なるは稍沈重を欠きて古代模様の厳格なるに若かず」

浅太郎が、それまでの布志名焼の特徴である黄釉の製品とは違った釉薬の陶器を開発しているのがわかる。またバリ万博にもそれまでの布志名焼にない製品を出品していた(註41)。

海外向けの製品が振るわなくなったなりつつあった布志名はバリ万博の開催の年、出雲陶器専門の販売店を東京市京橋区に設け、国内販売に力を入れる(註42)。また県と八束郡から補助金を受け、明治三十五年(一九〇二)にそれまでの伝習所を試験場に改編した。これは下記のように実用的な製品の開発を目的としていたのである(註43)。

「由来出雲焼は軟質にして且黄釉を主とし樂山は一種古色の茶器類を主とするも将来世人の嗜好に応ずるには単に雅致を以てすへからず。大に実用に適せしめて販路を拡張せざるへからざるを以て土質釉料顔料を始め一切の工程を試験に徴して改良指導するの必要あり」そして、最後の内国博となった翌年の第五回内国勸業博覧会では、舟木合名会社、船木健右衛門、船木浅太郎、澤喜三郎が三等賞を得ることになった(註44)。このころの布志名の様子について、田中史好は下記のように記している(註45)。

「明治三十五年頃若山製陶業は全最盛期末なりとす。此当時の製陶業者は船木健右衛門、澤喜三郎、船木良右衛門、船木浅太郎、福島鹿之助、土屋武次郎、澤忠太郎、澤安孝、福島伊太郎の九軒、窯数

六個。之に属する各自所有に係る建築物は住宅、別座敷、土蔵、納屋、茶室、山荘、別荘等。業務使用として第一上等物工場、第二上等物工場、中等物工場、荒物工場、荷造場、陳列所、事務所、画工場、釉掛場、窯素屋、銷小屋等、若山全体に於て総建造物実に七十有餘棟を数へたり。」

そして「最盛期末」の布志名で、外国向製品の製造の中心となっていたのは、船木浅太郎であった(註46)。

「外国向美術品を製出せるは布志名若山船木浅太郎氏外名にして余は重に日用品を製し松江陶器商組合と連絡し其間屋の手を経て内地各地に販売せり」

この頃に製造されアメリカに輸出された陶器については、下記のような報告がある(註47)。

「出雲焼は其の皮色の無地に東京、横浜等に於て加工し、水銀にて龍の模様を付けたる者のみ。之れ一見頗る見付きよきを以て、非常の好評を博し、長く好価を得つつあり、茶器其他も一掛二十弗以上に及ぶ。然れども吾輩の見を以てすれば雲州焼の為に大に警戒を要するものあり、其は米国オハイオ州シンシナチ市付近より産するロツクウッドポタレーと称するもの、是雲州焼、紀州焼、伊予焼等の頸敵たるべき者ならんと思はるる事なり。」

それまでの出雲焼とは違う特徴を持つこうした陶器も、船木浅太郎が中心になって開発した新たな製品であつたらう。銀で龍の模様を描いている点は、前述の明治三十三年の日本美術協会の展覧会に出品された浅太郎の花びら「濃陰色の光沢釉上に古代模様を銀描せるもの」を思い起こさせる。しかし、絵付等が布志名ではなく東京、

横浜で行われていることは、特徴的である。またこの報告ではルックウッド・ボタリーの製品が出雲焼をはじめとする日本の陶器のライバルとされているのがわかる。その後、明治四十二年（一九〇九）のアメリカでも、同様の製品と思われる下記の様な報告がある（註48）。

「出雲産 之は元來純粹の出雲焼即ち「ナダレ」式のものに非ずして只だ単に出雲の素地を用ひたるのみなるが市場に於て之れを出雲焼として販売され居れり其は淡黒色の上に銀を以て象眼したるもの如く森村組に依て之の市場に紹介され斬新を好む購客には従来の陶磁器に比し其の趣味を異にし居るを以て比較的高価に販売されつつあり其の図様は多く龍を附したる見受く此の製品の欠点は銀色が漸次酸化して黒色となる。」

欧米の趣味の変化にあわせ、布志名は斬新な輸出陶器を開発したのである（図9）。



図8 《布志名焼 緑釉ティーポット》
明治～大正時代 個人蔵
「出雲」「大」印（船木浅太郎の灘船木窯の印）



図9 《布志名焼 銀彩紅茶器》明治～大正時代 島根県立美術館蔵
「大日本」「出雲」「友」印（尾野岩次郎の袖師窯の印）

おわりに

本稿では、明治期の布志名焼の製造者たちが輸出向の製品を中心に、技術改良や組織の整備を継続しておこない、短期間の内に事業を大きく進展させていったことを明らかにした。

まず、廃藩後の混乱から立ち直り、政府の美術工芸品輸出の政策にあわせ、窯元が結集して会社を設立し成功した。会社破産後の中期は布志名の輸出陶器が最も隆盛し、様々な改革がなされた時期となる。なかでも、明治二十五年（一八九二）の釉下彩の技術の導入は大きな変化であった。中期の前半は、器胎を布志名で製作し絵付は主に京都でおこなっていたが、釉下彩導入後には絵付を布志名で行い輸出するようになった。これにともない生産者の組合、伝習所などの組織も整備されたのである。後期にも欧米の趣味変化に合わせ新たな製品が開発され陶器の輸出は続けられていたが、製造の重点は、国内向けの日用品に移っていた。

しかし、布志名焼はこうした国内向けの日用品の製造により、生産のピークをむかえるのであった。現在も布志名で製造販売をおこなっている窯元のひとつ土屋窯の先代土屋善四郎は、当時の布志名の様子について下記のように述べている。

「大正時代となると、問屋を離れて直接各地へ売り出す人も出るようになった。製品は主に黄釉の日用品であった。当地方では子供が小学校を卒業すると多くは各窯元へ弟子入りして職工となり、あるいは下働きとして陶器工場へ就職したものだ。明治末期から大正中期ごろの全盛期には、各窯元合わせて三百人ほどの従業員が布志名において、盛況を極めていたほか、湯町、松江市、出雲市等にも布志

名焼系の窯があった。」（註49）

以上、明治期の布志名焼の変化について、その大まかな流れをおつた。今後も、当時製造された布志名焼のさらに詳しい調査を課題とし、継続して検証を行っていきたい。

- 註
- 1 『角川 日本陶磁大辞典』角川書店、平成十四年（二〇〇二）。
 - 2 藤原隆「出雲の雅陶 布志名焼」『布志名焼の美』出雲文化伝承館、平成二十三（二〇一一）。図6〜8は、この展覧会図録から転載させていただいた。
 - 3 澤喜三郎については、『島根の工芸』島根県立博物館、昭和六十二年（一九八七）
 - 4 土屋善四郎『布志名焼の歩み』昭和六十二年（一九八七）
 - 5 澤喜三郎「出雲通信」『大日本窯業協会雑誌』第六集第六十七号、大日本窯業協会、明治三十一年（一八九八）
 - 6 國雄行『博覧会の時代―明治政府の博覧会政策―』岩田書院、平成十七年（二〇〇五）
 - 7 五味良子「ルックウッド・ポタリーのジャポニスム」『東洋陶磁』第四十一号、東洋陶磁学会、平成二十三年（二〇一一）―平成二十四年（二〇一二）
 - 8 ゴッドフレッド・ワグネル『明治十年内国勸業博覧会報告書』内国勸業博覧会、明治十年（一八七七）。
 - 9 大築千里「出雲焼に就て」『大日本窯業協会雑誌』第六集第六十七号、明治三十一年（一八九八）の記事の中に掲載されたこの「陶器履歴書」は若山の陶器師総代の船木健右衛門が島根県勸業課に提出したもので、そこには「明治十年の冬より再び上等品製造仕候就ては当所窯元を若山と改号仕候」と記されている。
 - 10 澤喜三郎、前掲註5、この「工商会社」とは万博への参加を目的に政府によって設立された「起立工商会社」のことであろう。これまで、この若山会社は明治十年の設立とされることが多かったが、大築、前掲註9の記述をみると、明治十年に「若山」と改号し、その三年後に会社が設立された事がわかる。
 - 11 田中史好『布志名焼集説』。布志名焼の職工だった田中によるこの著書は、江戸から明治にかけての布志名焼の様子が詳しく記されている。島根県立図書館所蔵の稿本で、執筆された年は不明であるが、戦後に書かれたものようである。
 - 12 横井謙二郎「楽山・布志名の色絵」『楽山・布志名の色絵―はなやかな色絵の世界―』田部美術館、平成十年（一九九八）に、ここに登場する幾人かの布志名焼の画工についての記載がある。
 - 13 『第二回内国勸業博覧会出品目録』第二回内国勸業博覧会事務局、明治十四年（一八八一）
 - 14 澤喜三郎「出雲通信」『大日本大日本窯業協会雑誌』第六集第六十八号、大日本窯業協会、明治三十一年（一八九八）
 - 15 例えば、桑原羊次郎『出雲陶窯』島根県教育会、昭和八年（一九三三）では、土屋五代の伝太郎が若山会社を創立したとされている。また田中史好、前掲註12ではこの時期、他の布志名焼の窯元が「永原永造の傑作振りに感化された」としている。永原永造は幕末明治の名工で、藩窯だった永原の二代与造の三男で、明治二十一年（一八八八）に亡くなった（前掲註3）。
 - 16 製陶舎はこれまで明治三十年代に設立されたとされることが多かった。また田中、前掲註12では明治二十四、五年頃の創立とされている。しかし製陶舎の中心人物であった澤、前掲註15の

- 記述からは、明治二十年（一八八七）前後の設立であることがうかがえる。
- 18 澤、前掲註15。
- 19 従来、この時期に製造されたと思われる輸出陶器が、明治期の布志名の輸出陶器の代表的なものされてきた。島根県立美術館にも、この時期の輸出陶器が多く收藏されている。そして、こうした作品には、京都の間屋の名と思われる朱書きがあるものが多い。
- 20 田中史好、前掲註12。
- 21 この釉下彩の技法の由来について大築千里、前掲註9では、次のように記している。「会々米国製陶器の布志名に由来あり該地の陶工其品質面様等を見るに及んで羨望の念禁ずる能わず。川上岩倉諸氏の協力に依り熱心之に模擬せん事を勉め遂にコバルトを用いて彩画を施すに至れり。然れども海外の需要日を追って増加し来り彩画も単にコバルトのみを以て已むべきにあらずとて熱心其攻究に従事し遂に種々の色画を施し続て今日の如き釉底の彩画を製作するに至れり」。「川上」、「岩倉」（図1-4）は松江の陶器を扱う陶商だった。
- 22 荒川正明「陶芸における世紀末様式——十九世紀末の西洋と日本の美術陶磁の交流——」『出光美術館研究紀要』第一号、出光美術館、平成七年（一九九五）。
- 23 澤喜三郎「明治二十八年從七月至十二月 布志名陶器業組合事業」『大日本窯業協会雑誌』第四集第四十三号、大日本窯業協会、明治二十九年三月。またこの発明について澤は「吾出雲陶器に一変革を来せり」とその発明を自負している（前掲註5）。
- 24 白山谷喜太郎「米国ロックウッド製陶所の現況」『第六回商品改良会報告』農商務省商務局、大正二年（一九一三）。
- 25 森仁史「アメリカのジャポニスムールックウッド製陶所をめぐって」『近代陶磁』第十一号、平成二十二年（二〇一〇）。ポストン美術館所蔵のモース・コレクションのカタログによると、モースのコレクション中の出雲焼は明治期のものも若干存在するが、殆どが江戸時代のものである。また京都の清風与平による、ストラー夫人が何度も来日して日本の陶磁器を研究していたとの記述もある。（「陶山及清風両君の陶磁器談」『大日本窯業協会雑誌』第七集第八十三号、大日本窯業協会、明治三十二年（一八九九））
- 26 田中史好、前掲註12。
- 27 「布志名陶器の好評 同陶器は古来有名なるものなることは人の既に知るところなり先般東京上野公園内桜ヶ岡日本美術展覽会へ船木健右衛門澤喜三郎の兩人新発明釉下彩画入花瓶一個を出品せしところ審査好結果を得三等銅賞牌を受けたり（後略）」『大日本窯業協会雑誌』第二集第十三号、大日本窯業協会、明治二十六年（一八九三）
- 28 東京国立文化財研究所『明治期万国博覧会美術品出品目録』中央公論美術出版、平成九年（一九九七）では、この出品作品が釉下彩かどうかはわからなかった。『玉湯町史』下巻一、玉湯町、昭和五十七年（一九八二）には、このとき製陶舎の職工で上等物師（美術師）であった福間清市がシカゴ・コロンブス万

- 29 『大日本窯業協会雑誌』第三集第三十六号、大日本窯業協会、明治二十八年（一八九五）および、『大日本窯業協会雑誌』第四集第四十号、大日本窯業協会、明治二十八年（一八九五）。第四回内国博では、製陶舎の作品に加えて、船木浅太郎の作品も授賞している。
- 30 「布志名陶器の現在将来」『山陰新聞』明治二十九年（一八九六）八月一日。
- 31 澤喜三郎「明治二十八年從七月至十二月布志名陶器業組合事績」『大日本窯業協会雑誌』第四集第四十三号、大日本窯業協会、明治二十九年（一八九六）。
- 32 澤喜三郎「出雲国布志名陶器業組合規約」『大日本窯業協会雑誌』第三集第三十七号、大日本窯業協会、明治二十八年（一八九五）。
- 33 この伝習所で、絵付を指導した人物として安井如苞が知られる。田中、前掲註12では、安井を瀬戸陶器学校の教授とし、「安井氏就任後第一に画の具及び描画の様式を改善し自家独創に係る沈殿式描画法開放教授せらる傍ら各工場の職工及び画工を対象に製作品新図案の懸賞募集数回に至りたり其入選図案は各工場に於て製出せしめる等斯業に益する実に大なるものあり」と述べている。この「沈殿式描画法」は釉下彩による絵付けの方法と思われる。
- 34 「出雲陶器改良補助費」『大日本窯業協会雑誌』第六集第六十三号、大日本窯業協会、明治三十年（一八九七）。
- 35 『布志名焼絵付師 得能興州原画展』玉湯町立出雲玉作資料館、昭和五十六年（一九八一）、現在の松江市立出雲玉作資料館には、布志名焼の作品他こうした絵付の原画等、貴重な資料が収蔵されている。
- 36 澤喜三郎「出雲通信」『大日本窯業協会雑誌』第七集第七十四号、大日本窯業協会、明治三十一年（一八九八）、「経済界の不振は当業に一頓挫を来たせしが故外国輸出品杜絶し未だ再輸出を試むの運に至らず目下専ら内地向品の製造に従事せり火鉢花瓶茶器等夥多の需用ありて供給常に不足を感じる程なり其他粗陶器の如き実用上磁器に譲る点あるも低廉なるか為め需要多し」。
- 37 澤喜三郎「出雲通信 巴里博覧会本県出品評」『大日本窯業協会雑誌』第八集第九十号、大日本窯業協会、明治三十三年（一九〇〇）。塩田氏は明治29年にも来県し、松江市物産品評会で審査員をしている。
- 38 東京国立文化財研究所、前掲註26。
- 39 五味良子、前掲註7。またおそらくルックウツドの製品と思われる下記のような記事がある「合衆国出品は甚だ少し其最も目立ちたるものは本邦の出雲焼に類せり」（「巴里博覧会の陶磁器」『大日本窯業協会雑誌』第九集第九十八号、大日本窯業協会、明治三十三年（一九〇〇）。
- 40 塩田力蔵「春季美術展覧会管見」『大日本窯業協会雑誌』第八集第九十四号、大日本窯業協会、明治三十三年（一九〇〇）。
- 41 澤喜三郎、前掲註35。
- 42 「出雲通信 出雲陶器販路の拡張」『大日本窯業協会雑誌』第八

- 集第九十二号、大日本窯業協会、明治三十三年（一九〇〇）。
 山陰新聞「出雲陶器業組合の製陶試験場」『大日本窯業協会雑誌』第九集第百八号、大日本窯業協会、明治三十四年（一九〇一）。
- 44 「第五回内国勸業博覧会受章者人名表（前号の続き）」『大日本窯業協会雑誌』第十二集第百三十三号、大日本窯業協会、明治三十六年（一九〇三）。
- 45 田中史好、前掲註12。
- 46 島田彌市「出雲石見通信」『大日本窯業協会雑誌』第十三集第百四十五号、大日本窯業協会、明治三十七年（一九〇四）。この号から、通信員がそれまでの澤喜三郎から島田彌市に代わっている。澤喜三郎については「（前略）澤喜三郎（六代）は別記の通り、企業の拡張と云うより、技術と事業の発展を計ったのである。先代大一郎の事業失敗（大阪方面に販路を求め営業所を設置したのであるが、取引の関係より集金が出来ず各窯元への商品代支払が出来ず、責任を取り田、畑、総てを整理して負債にあてたのである）により窯場は閉じた。」という記載があり、おそらくこの時期のことと思われる。（澤薫「布志名焼窯はのこった（消えた黄釉）」昭和五十六年（一九八一））
- 47 「北米通信」『大日本窯業協会雑誌』第十二集第百三十八号、大日本窯業協会、明治三十七年（一九〇四）。ここでは、ルックウッド・ポタリーについて、さらに次のように記している。
 「此焼物は極めて文明の科学を利用し、学理的に製造する者にして、実に讃嘆に値すべき者なり、目下は黒き衣模様に栗色の釉薬をかけたる者のみ多しと雖も、其性質頗る前述諸種に変化し易きを以て、漸次分科すべきを思はざるを得ず、尚ほ又此種は米国人間にも大に愛玩せられ、其工場の模様も大なれば将来大に発達すべきや疑を入れずして、日本職工をも雇入れありて其意向をも判じ得べきなり、（後略）」
- 48 「米国に於ける本邦陶器の状況（四十二年一月二十五日農商務省商彙報）」『大日本窯業協会雑誌』第十七集第百九十九号、大日本窯業協会、明治四十二年（一九〇九）。
- 49 土屋善四郎、前掲註4。

島根県立石見美術館
研究紀要 第6号

発行日－平成24年3月31日

編集発行－島根県立石見美術館

〒698-0022 益田市有明町5-15

TEL 0856-23-2050 FAX 0856-31-1878

印刷－株式会社タイピック